

派遣事業研修報告②

海外5カ国（ブラジル・アルゼンチン・ボリビア・ペルー・米国ロサンゼルス）へ
今月はペルー・ロサンゼルスでの研修について報告します。



ペルー

Peru

2月2日～2月6日



▲ペルー沖縄県人会館を視察



▲ペルー沖縄まつりのパレードにて



▲婦人会の弁当作りの様子



▲ペルーの金武町人会青年会の方々と交流

ペルーと言えば、インカ帝国の遺跡群を連想していた私。首都リマはそんな想像を覆す大都会でした。海岸の曲線に沿った断崖絶壁に何層もなるショッピング街は、自然を活かした魅せる建築で、まさに現代のマチュピチュです。沖縄祭りでペルーのウチナーンチュが大集合し、子ども達にサンイチャリバチョーデーについて伝えたり、婦人会の手作り弁当が振舞われたり、野外ステージでは伝統芸能の披露があり、昨年の研修生ミノル君が金武町人会代表として披露したかぎやで風の演舞に、誇らしく嬉しく思いました。皆がウチナーンチュのアイデンティティを継承し、各市町村人会が手を取り合う姿にペルーのゆいまるる精神を感じました。 ～仲間 周～

ペルーではリマ市内や伝統的なダンスの視察やインカ博物館へ行きペルーの歴史などを学びました。また、沖縄祭りにも参加し、沖縄祭りの舞台では、かぎやで風の披露や日系人の方々のペルーでの活躍を紹介したりしていました。さらにパレードもあり、私たちも金武町人会として参加しました。パレードで他の市町村の方々は、特産品などを様々な方法でアピールしていて、遠く離れたペルーでも沖縄を思う気持ちを強く感じ感動しました。また私たちは、沖縄にルーツを持ちペルーで活躍するアーティストのMarcelo Wongさんともお会いすることができ、同じ沖縄の人が海外でも活躍しているということをととても誇らしく思いました。 ～保良 祐衣子～

うちなーぐち
わしいていならんどー
あまね

研修先で金武町を、沖縄を想っている人々にたくさん出会いました。「なまぬ福花やいちゃなとうーが?」「屋嘉の同級生や元気いえーびがや?」等々。現在の金武町について質問されたり、また懐かしい話に花を咲かせる場面もありました。どの国を訪れても、あたかも自分が金武にいるかのように感じられました。皆うちなんちゅのアイデンティティ持ち、時代を越えて受け継がれています。その一つに三線、琉球舞踊等の文化継承があります。実際に、言葉が通じなくても一緒に三線を弾いたり、島人の宝を合唱すると、お互いうちなんちゅだという一体感に包まれました。また、生活や慣習を通して感じるアイデンティティの話や、個々の内面に迫る話を聞けたのはとても心揺さぶられる経験でした。

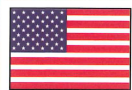
一方、世代間で距離を感じることもしばしばありました。年配の方と話していると、どの国でも誰かしらに、うちなーぐちわしいならんどーと言われました。沖縄にいても日常会話ができる世代も減少の一途。なかなか難しい課題を突き付けられる思いがしました。我々は沖縄の何を大切に思い、何を受け継ぎ、子どもに何を伝えたいでしょうか?沖縄を離れて、改めて考えさせられました。海外から見た今の沖縄、金武町にも様々な意見を聞くことが出来ました。この研修で得た新たな視点、今後に活かしつつ、今以上に各国の金武ちゅと交流、協力関係の継続を望んでやみません。



なか ま あまね
仲間 周

平成 30 年度 青年海外

先月号に引き続き、平成31年1月9日～2月12日に実施された青年海外派遣事業で行って来た研修生、保良祐衣子さん・仲間周さんの研修報告をシリーズでお届けします。



ロサンゼルス Los Angeles 2月7日～2月10日

北米金武クラブ。町人会とは名乗らず沖縄県人会とも異して、あえて独立した存在であり、皆そこに強い誇りを持っています。とくに1世2世の方は生きた金武くとうばを使います。私になまじ方言を使ったばかりに苦い顔をされてしまいました。なかなか厳しいですが、私が沖縄にいる金武チュだからこそでしょう。クラブの運営は、現在30代の元海外移住者子弟研修生の方が担っており、皆さんとても金武町の“通”です。お互いの課題を共有し、始めはざっくばらんに話し、いつしか白熱した議論に発展していました。惜しみ無い意見交換が出来る自由な雰囲気アメリカらしいなと思いました。～仲間周～

私はロサンゼルスへ行くのは二度目でしたが、前回の観光だけの時とは違い、親戚に会って移民当時の話を聞いたり、ロサンゼルスで日系人の歴史を学ぶことができました。移民当時の話の中で、金武町出身の方がリトルトーキョーという日系人街に銀行を作ったという話が印象的でした。ロサンゼルスにある北米金武クラブは、若い世代の方々が引っ張っており、私の中学校の頃の英語の先生であるニーナ先生もその一員で、今の金武町人会を支えている立場としての話を沢山聞くことができました。私はこれまで沖縄からアメリカへ移民した歴史しか知らなかったのですが、今の二世三世の方々の考えや思いについては知る機会がなかったので、とても考えさせられるよい機会でした。～保良祐衣子～



▲金武“通”の元研修生の皆さん



▲北米金武クラブの皆さんと



▲元研修生の皆さんと交流



▲ニーナ先生の祖父で大城銀正さんから移民当時の話を聞きました

世界にある金武町を
もっと知ってほしい
ゆいこ



やすら ゆいこ
保良 祐衣子

小学生の頃から當山久三の業績や移民の歴史などを学びましたが、現地での生活のことは考えたことがありませんでした。しかしこの研修を通して、“沖縄を思う気持ち”の強さが過酷な労働環境の中での人々の支えになったということを知りました。そしてその思いを、一世の方々は子や孫へしっかり伝えていけるのだと感じる場面が多くありました。伝統芸能の継承が問題視されている中で、南米で聞こえてくるウチナーグチや三線、太鼓の音などの受け継がれている文化に感銘を受けました。地球の反対側にいる方々が沖縄のことを常に思い、ウチナーンチュとしての誇りを持っていることを現地へ行き実感しました。日本とは違った文化や習慣を自分の肌で感じる事ができたのと同時に、沖縄の文化を残しつつ南米の文化を取り入れるチャンプルー文化が根付いていると感じました。それはいくら本を読んだり話を聞くだけでは分からないことだと思います。また、南米の多くの人たちと「ウチナーンチュ」ということで繋がることができ、本当の家族のように接してくれ、私たちに“ふるさと”を作ってくれました。私も世界の金武町の人々のふるさとを作っていけるよう、南米と金武町との懸け橋になっていきたいです。そして沢山の人が「世界の人たちともっと交流して沖縄にある金武町だけでなく世界にある金武町を知ってほしい」と思いました。そして私なりのやり方で沢山の人がこの繋がりを発信し、共有していきたいです。